禁転載

【人文科学部門　共同研究】

五言語合璧「普度明太祖長巻」（15世紀）の言語文献学・美術史的研究

松川　　節　　大谷大学社会学部　教授

永楽5年（1407年）、明の永楽帝は南京近郊の霊谷寺で父母（洪武帝と馬皇后）の追善法要を開催し、チベット仏教カルマ派の化身ラマ第5世カルマパ・テシンシェクパを招いて法会を主管させた。この法会を記録した長さ50メートルの画巻“如来大宝法王建普度明太祖長巻”は、漢語・モンゴル語・チベット語・ペルシア語・タイ語の五言語の詞書を伴っている。この資料はユーラシア東方世界における最初期の多言語合璧資料の一つであり、永楽帝の対外政策や仏教術語の翻訳伝播に関わる重要な研究対象となっている。

研究チームは2001年から現地調査と文献解読を進め、2022年7月に三島財団助成金を得て総合的解読研究を開始し、各言語の専門家と美術史研究者が参加し、毎月研究会を開催してきた。新型コロナの影響でチベット自治区への渡航が実現せず、既公表の図版に基づいて研究を進めた。2024年3月には南京市近郊の霊谷寺を訪れ、南京大学にて国際研究交流を行い、2024年6月に最終成果報告会を京都大学で開催し、解読結果を共有した。最終成果は2024年12月末に刊行予定である。

この画巻は永楽帝の領土拡張・朝貢政策と関連し、漢語、チベット語、モンゴル語、ペルシア語、タイ語が並記されている。タイ文字が90度右回転された縦方向の表記となってい点や、漢語部分の「赤丸」の使用も特徴的である。モンゴル語部分は先古典期モンゴル語時代のものであることが証明され、タイ語部分も文字系統や歴史言語学的特徴が評価されている。

禁転載

【人文科学部門　個人研究】

仏典の翻訳・校正マニュアル『賢者の源』のチベット・モンゴル語のテクスト校訂

ARILDII BURMAA（アリルディー・ボルマー）　神戸市外国語大学　非常勤講師

本研究は、大乗仏教の発展やその変遷について、モンゴル仏典によっても追究することができるという指摘を具体化させる実戦段階として位置付けられる。『賢者の源』（チベット語 → モンゴル語のためのガイドライン）は『二巻本訳語釈』（サンスクリット → チベット語のためのガイドライン）の延長線にあり、前者は後者より仏典翻訳規則がより詳細である。これは、後者に含まれる仏教の発展や変容について、前者によって追えないことを意味する。『賢者の源』は仏典をモンゴル語訳する翻訳・校正マニュアルとして著作され、『賢者の源』の成立以降の時代に翻訳された文献については、影響力が認められた。従って、モンゴル仏教を代表する文献であるので、本研究は『賢者の源』のチベット語原文テクストとモンゴル語訳テクストの校訂版を作成した。

『賢者の源』は、原典であるチベット語単行のテクストと、モンゴル語訳の対訳を伴う対訳形式テクストの二種類である。本研究は、北京版チャンキャ３世ルルペードルジェ（lCang skya rol pa'i rdo rje, 1717–1786）の全集所収の『賢者の源』（1730年代後半）と北京版（1742）とアギ寺版（1924）と言う３種のチベット語原文テクスト、モンゴル語訳については北京版とアギ寺版の２種のテクストを参照した。

モンゴル族にとってラクダとは何か？ ―極乾燥地の人–動物関係と牧畜文化の民族誌的研究

WU WUYUNGA　総合研究大学院大学

本研究の目的は、中国内モンゴル自治区アラシャー盟のゴビ砂漠においてフタコブラクダ放牧を続けるモンゴル族を対象とし、(1) 1940年代から現在に至るまでの80年間の放牧技術や利用形態、認識体系の変遷を民族誌的に記録するとともに、(2) 同時代軸における国家政策や社会経済的な状況、自然環境の変化を通時的に明らかにする。その上で、(3) ラクダとの経験や記憶などの分析も踏まえながら「モンゴル族にとってラクダとは何か」という問いを考察するものである。すなわち、本研究はラクダがもつ多元的な価値と極乾燥地域で生きる動機や技術を明らかにすることで、動物と人との関係をめぐる先行の議論に新たな事例と見解を提供するものである。

報告者は2022年から2023年にかけて、アラシャー盟におけるラクダ牧畜民とラクダ乳・肉生産業者、政府関係者などといった人々を対象とし、聞き取り調査を行った。また牧畜民の家に住み込み、彼らのラクダ放牧技術を観察し、記録することができた。特に、聞き取り調査から、アラシャー盟における80年間のラクダ牧畜の変容と実態を記録することができた。さらに、それぞれの時代における家畜の群れと所有権、放牧技術、利用などの実態をまとめ、各時代の特徴を導き出した。

禁転載

星辰崇拝の様相について：古代メソポタミア文明期から イスラーム期までの連続と変容

江原　聡子　　東京大学大学院総合文化研究科　博士課程

本研究は、3千年以上の歴史を持つ北シリアの異教都市ハランの、古代メソポタミア文明期からイスラーム期を貫く宗教伝統を追求することを目的としている。ハランの人々はイスラーム期においても、「サービア教徒」と名乗り、古代メソポタミア文明期以来の宗教伝統を守っていたと思われる。

今回テーマとした星辰崇拝について、シュメルに遡るタンムーズという神に捧げられた泣哭儀礼と、新アッシリア期のハランの哀悼祭司ウラド・エアの文書を課題とした。渡航先で参加した研究プロジェクト内での指導により、前者の儀礼に関するアッカド語の文書を徹底的に解読、解釈し、イスラーム期のアラビア語文献までの継続と変容の証明に至り、英文の論文をまとめ、欧文学術誌への投稿を果たした。その過程で、イスラーム期のハランのサービア教徒たちが整えた教義の基底にあるものを見つけることができた。

またウラド・エアがアッシリア王に伝えた天文・星辰の兆候については、特に詳細な指導を受けることができた。合わせて他の古代メソポタミアの星辰関連の文書から、7惑星に関する観念がイスラーム期まで継続していたことを見出だした。

具体的な研究活動については、受入研究者のG教授に複数回のミーティングを持っていただき、博士論文の内容について外国語でプレゼンを行ったことが大きな力となった。また教授の研究プロジェクト内の研究発表会に出席して活発に質疑応答を交わし、アッシリア学に関する知見を高めた。もっとも有意義であったのは、2022年12月にエルサレムのノートル・ダーム大学で行われた国際会議に出席したことであり、これは、カトリックの司祭が初期のアッシリア学に関してどのような貢献をしたかというテーマで開催され、世界各地からアッシリア学の専門家が集まり、発表を行った。発表者の教授たちとハンムラビ法典やシュメル・アッカド文学について意見交換したことの意義も大きい。なにより、彼らのほとんどがイスラーム期においてなお古代メソポタミア文明の宗教伝統が生き延びていたことを認識しているものの、両時代にまたがる研究はなかなか難しい、しかしながら有意義だという意見を持っていることを聞けたことは、今後の研究について大いに励みになった。

このような刺激を受けつつ、ハランに関わるアッカド語文書を読み進めているうち、新アッシリア帝国の碑文と新バビロニア期の碑文に共通するものを見つけ出し、その解釈が正しいかどうか、博士論文に用いることができるかどうかをG教授に訊いてみると、「それはもちろん用いるべき」というお返事をいただいた。「アッカド語とアラビア語両方に知見のある研究者は少ない。このまま頑張って欲しい」との励ましのお言葉をいただいたことも励みになったと思う。

博士論文に必要なアッシリア学関連の知識はこれで一区切りがついたと感じているため、今後は、イスラーム期のハランに関わる星辰崇拝のアラビア語文書を深く検討する必要があるだろう。

禁転載

無常鬼の研究――中国をフィールドとした妖怪学の試み

大谷　亨　　東北大学大学院国際文化研究科　CSIGSフェロー

本研究期間中、私はマレーシアの華人社会で流行する無常信仰を調査した（無常とは、華人の民間信仰に息づく死神のことである）。

元来、無常はヤクザな人々に信仰されるいかがわしい冥界の神（陰神）であった。だが近年、正業に就く一般大衆の支持をにわかに集めるようになり、天上界の神（陽神）を祀る陽廟に無常の祭壇が増設され始めている。そんな不可解な事態が本調査を通じて明らかとなった。

先述のとおり、元来無常とは真っ当ではない望みを叶えるいかがわしい神である。しかし、近年の流行において人々は、無常に対して健康・仕事・学業・恋愛等々に関するごく真っ当な望みを願掛けするのだという。いうまでもなく、本来こうした望みは陽神に願掛けするものであり、なぜあえて陰神である無常に持ちかけるのかが問題として浮上することとなった。

しかし、結論からいえば、本研究期間中に上記課題に明確な回答を用意することはできなかった。今後は、マレーシア華人社会という総体のなかに無常信仰を位置づける視点のもと社会学的な考察を進める必要があるのだろう。

最後に、本研究期間中に、これまでの無常研究の成果をまとめた『中国の死神』（青弓社、2023年）を上梓できたことをここに報告する。一重に本助成のおかげである。

クメール建築の連子子における美術史ならびに建造技術史的特質

岡﨑　伸哉　　日本工業大学大学院工学研究科　博士課程

クメール建築の窓枠内に建て込まれた円柱状の石製竪格子である連子子を美術史ならびに建造技術史的観点から考察し、その特質を明らかとすることを試みた。

連子子は少なくとも879年にはクメールの建築様式として定着していた。この頃は四角形の枘が連子子の両端に施され、窓枠に開けられた四角形のダボ穴に枘を納めることで連子子を窓枠に固定していたが、枘とダボ穴の形状は時代が下った1026年には円形断面へと変化を遂げている。他方で近隣のチャンパでも連子子と枘が確認でき、9世紀後半に建造されたチャンパ建築の窓枠のダボ穴は四角形であった。このことからクメールとチャンパとの間で、連子子が建築様式として伝播したことが想定できる。しかし、クメールとチャンパとでは連子子の装飾的特徴が異なり、チャンパは初期ルネサンス以降の西洋建築の手すり格子との形状的類似が指摘できるが、クメールの類似形状は現状では発見されていない。一方でスコータイやアユタヤの窓がクメール建築の連子子の影響を受けたとされていることから、クメール建築の連子子は美術史的な独自性を有するとともに、東南アジア大陸部の建築に建造技術史的な影響を与えたと考えることができる。

禁転載

古代東アジアにおける「辺境島嶼」支配と入境管理体制の研究

柿沼　亮介　　早稲田大学高等学院　教諭

本研究は、東アジアの入境管理体制について越境者の動向や在地勢力の関わり方から検討することで、国家による「辺境」支配の特質やその限界を明らかにし、国家間関係を支えていた個別的な交流の諸相を解き明かすことを目指すものである。そのため、「国境地域」の「辺境島嶼」に注目し、こうした島々における対外通交の歴史的変遷や島の政治・行政・経済・社会・文化の状況について検討した。特に、朝鮮半島西岸に位置し中国山東省との通交経路として重要な役割を果たしていた白翎島、中国福建省の沿海に所在する中華民国領の島嶼である金門、古代日本で令制国に準ずる「嶋」が置かれた対馬と、あくまで郡として扱われた甑島などを比較した。本研究を通して、「辺境島嶼」においては「国境」を接する地域であるからこそ経済的恩恵を享受することができたり、中央政府との直接的な結びつきによって政治的に優遇を受ける現象がみられることが明らかとなった。そしてこうした島民たちの動向こそが、「辺境島嶼」によって結び付けられる国際秩序の一翼をなしていたと考えられる。このような国家と「辺境島嶼」との緊張関係は、現在の《国境離島》においてもみられるものである。

モンゴルにおける西洋からの宣教師たちの医療衛生活動に関する史料研究

近衛　飛鳥　　千葉工業大学社会システム科学部　助教

19～20世紀前半の間、西洋（西ヨーロッパ諸国とアメリカの双方）からの宣教師が遊牧民のモンゴル人社会の医療衛生の近代化に果たした役割を文献史料に依拠して明らかにしようとするプロジェクトである。新型肺炎が世界中で猖獗を極め、パンデミックによる恐怖に包まれた中で実施された当該研究調査から得られた成果は極めて豊富である。

西洋から宣教師は自らの活動と使命について、厖大な量に上る私文書と公文書を残した。それらの文書史料は現在、世界各地の大学図書館と研究機関、教会と文書館等に保管されている。貴財団の研究支援で得られ、下記の研究調査を実施できた。

2022年9月にアメリカ合衆国に渡った。首都ワシントンにある議会図書館をはじめ、ボストンのハーバード大学とニューヨーク州にあるコロンビア大学などで宣教師の遺した記録を調査できた。また2023年5月に台湾に赴き、台北にある国史舘と国家図書館、中央研究院歴史档案館、それに真理大学において、中華民国政府の対西洋宣教師政策について档案調査ができた。収集・把握した史料に考察・分析を加え、研究成果として公表に向けて邁進していく所存である。記して心から感謝申し上げる。

禁転載

モンゴル高原所在の古代トルコ語碑文に対する文献学的研究

齊藤　茂雄　　帝京大学文化財研究所　講師

本研究では、8世紀前半に作成が始まったトルコ＝ルーン文字による古代トルコ語碑文の碑刻形式について論じた。トルコ＝ルーン文字は横書き字であるにもかかわらず、初期の碑文は縦書きされるのが一般的であるが、なぜそのような形式を採るのか考察されてこなかった。本研究では、現地調査を行って初期の碑文にも横書きの文章が確かに存在すること、そして、縦書きが一般的である初期の碑文でも、本来の書写方向は横書きとみられることを確認した。

さらに、碑文が横書きされる原因を探るため、突厥第二可汗国第3代の毗伽可汗期に作成された暾欲谷碑文・闕特勤碑文・毗伽可汗碑文の三碑文を取り上げて、どのように碑文が碑刻されているかを検討した。その結果として、碑文が縦書きされているのは中国の漢文による文字文化の影響を受けたものであるという結論に達した。しかし、8世紀半ばまでは漢文の影響が見られるが、9世紀以降にはトルコ＝ルーン文字は横書きが主要となり、漢文の影響から脱すると見なすことができる。

欧州冷戦と中国：中国の「ドイツ問題」関与と対東西ドイツ政策1949 ～ 1965

邵　　天澤　　京都大学大学院　人間･環境学研究科　博士課程

冷戦史を語る際、米国とソ連を代表とする東西二大陣営の盟主がヨーロッパ地域を初めて、アジア・アフリカ地域を舞台に展開された両国の熾烈な競争を焦点にした先行研究が多かった。しかし、本研究は、これまでの研究と違う視点に立脚し、冷戦期における中国がヨーロッパ冷戦への影響力、具体的に欧州冷戦の焦点である、主に東西ドイツが代表権を争う「ドイツ問題」と呼ばれる国際紛争への関与を中心に、欧州地域に向ける中国の外交戦略を解明することにする。貴財団の助成期間の研究成果として、中国は1950年代初期に、自国が朝鮮戦争の参戦によって国際社会に課された制裁を受けたにも関わらず、東ベルリン暴動事件をきっかけに苦境に陥った東ドイツを果敢に食糧を中心とした援助を行った。これらの一連の史実をマルチアーカイブの手法によって明らかにされた。中国の対東ドイツの援助は「ドイツ問題」への関与を確立し、確実に影響力を発揮したこど確認された。研究成果を活かして、国際学術誌への投稿を積極的にチャレンジしたいと考える。

禁転載

満洲を生きた在華新聞人―盛京時報社の人々を中心に―

徐　　璐　　京都大学文学研究科　博士後期課程

かつて中国で漢字新聞経営を行う日本人がいた。彼らは邦字新聞をはじめ、英字新聞や漢字新聞を発行し、そのいくつかは有力紙としての地位を築いたが、それを作ったのは名も無き新聞人であった。歴史の片隅におきざりにされた在華新聞人について、我々はいかに語ることができるのだろうか。

本研究は、代表紙である盛京時報社に着目しながら、在華新聞人の生き様を見てきた。盛京時報社の人々は、東亜同文書院の卒業者または関係者が多く、報国の志をペンに託そうとして、中国を学ぼうとして、あるいは成り行きで新聞業界に身を投じ、日中関係が激しく変動する中、自ら対中宣伝の陣頭に立ったり、あるいは立つことを余儀なくされたりした。一方、彼らの目指すものや協力のあり方は様々であり、決して一様に生きたわけではなかった。主筆の菊池貞二は、対中宣伝の使命を強く意識しながら、長年『盛京時報』の筆政を主宰した。その過程で、張作霖政権に弾圧されたり、中国側に「文化的侵略者」と批判されたりして、最後まで対中宣伝の先兵という役割を全うした。記者の佐藤善雄は、漢字新聞の編集作業がなかなか好きになれず、一方的な対中宣伝に異論を持つようになった。のちに盛京時報社から離れ、邦字新聞を創刊して軍部と対抗した。結局、「満洲国」建国早々に内地へ引き揚げ、反戦主義者と目されて、戦中は多事多難な生活を送った。同じ記者だった尾形順次は日本人の満洲に対する関心の高い時期に渡満して盛京時報社に入り、在華新聞人となった。終戦後にソ連へ連れ出され、そこで辛い経験をした。日中国交回復後は、両国友好の代表者として中国を三回も訪問した。まさに時代と運命に翻弄されて生きたといえよう。

モンゴル国における伝統的牧畜の継承に関する研究
―進学と職業選択に着目して―

中村　絵里　　千葉大学　未来医療教育研究機構　特任助教

本研究では、モンゴルにおいて、自然の脅威に晒される過酷な労働・生活環境にも関わらず、なぜ若者が伝統的牧畜を継承するのかを明らかにした。政府統計では過去10年、牧畜世帯が増加傾向にあり、その規定要因を検討するために、モンゴルの首都と国内最大の牧畜世帯数を有する地方県で現地調査を実施した。調査の結果、政府統計と実際の牧畜世帯数には乖離があり、貧しい牧民を支援する国の補助金政策が若者の委託放牧を助長させていることが示唆された。また、若者の高い失業率を考慮すると、高等教育・TVETの果たすべき機能は、卒業後に牧民となり専門外の職業に就いた若者が、学校で修得したスキルを活かして副業により生活を安定させることである。そのためには教育の質保証が鍵となる。一方で、「真の」牧民として、地方で牧畜業を営む人々の語りには、家族の生業を継ぐことへの強い責任感、自然と動物への畏敬の念、自然環境をありのまま受容し生態系を保全する強い意志が見いだされた。彼らの言葉には、共通して文化的アイデンティティと牧民の誇りが根付いていた。今後は、調査対象を拡大し、伝統的生業の継承と高等教育との関連を検討していくことが課題である。

禁転載

1990年代韓国における分断と反共独裁の記憶をめぐる葛藤
―進歩派の記憶変遷を中心に―

パトリック・フィアターラ　京都大学文学研究科現代史専修　博士後期課程

韓国社会は特に2000年代半ば以降、植民地時代、南北分断、それから軍事独裁の記憶をめぐって歴史認識の対立を経験している。歴史教科書の内容や国立博物館の常設展をめぐり、近現代史が激しき論争されている。本研究では、その論争の一つとして、民主化以降の大韓民国における南北分断と反共独裁の記憶をめぐる葛藤について、いわば「進歩派」の集合的記憶の変遷を中心に分析した。進歩派とは1970～80年代の反体制運動に起源を持つ勢力であり、1998～2008年と2017～2022年の執権勢力であった。本研究では具体的に、ドイツの記憶研究方法を用い、政治＝学界＝メディア＝市民社会の相互関係に焦点を当て、特に一般向け歴史書における歴史認識を分析してきた。分析結果としては、1987年の民主化前後の強い継承性が見られるということが明らかになった。つまり、1980年代の反体制派と、1990年代以降の政治勢力としての進歩派の集合的記憶における継承性が目立つということである。これまでに保守派を中心に研究してきたが、本研究の成果として、2000年代以降の保守―進歩間の理念対立の主要要因を解明することができた。本研究を通して、韓国国内の歴史認識対立のみならず、日韓間の歴史認識問題への解決につながると期待する。

オーストロネシア諸語の記述文法作成に向けた
民話・談話・用例テキストの保存

深谷　康佳　広島大学　博士課程後期
（現 広島大学・人間社会科学研究科　研究員）

本研究は、オーストロネシア諸語の記述文法作成、具体的には文法の記述・テキストの公開・辞書の作成を目標としている。目標達成のため、言語資料の収集を行い、資料の公開に向けて資料のテキストデータ化を行なった。

具体的には、オーストロネシア諸語の記述文法作成へ向けた言語資料の保存としてオンライン辞書の試作を行なった。また、それに並行して行う必要のある文法トピックの記述、特にオーストロネシア語族に特徴的とされる1人称代名詞体系の記述を行った。人称代名詞については、フィールドワークに基づいた本研究により、ケラビット語の人称代名詞の体系を明らかにし、周辺言語との比較を行った。その結果、ボルネオ島、サラワク州北部に位置する諸語は、1人称代名詞非単数形に、(1) 数詞＋人称の要素を持つ形式の除外形（聞き手を含まない私たち）と、(2) 他の人称とは共通しない独特の形式の包括形（聞き手を含む私たち）の両方を持つという地理・系統的な特徴を示した。言語資料保存に関しては、TEI形式のXMLファイルからXSLTファイルを通してHTML形式に変換するという、オンライン辞書の作成の初期段階となる、テキストデータからオンライン辞書へのアウトプットの雛形を作成した。

禁転載

インダス文明期小規模遺跡を対象とした、土器の生産と流通に関する学際的研究

三木　健裕　　東京大学総合研究博物館　特任助教

現在の南アジア地域には、紀元前2600年から1900年頃までインダス文明社会が存在していた。この文明社会は「斉一かつ広域的な大型都市遺跡」と「非斉一かつ地域多様性の高い小規模遺跡」という相矛盾するふたつの側面を有しており、土器の生産・流通はこれらふたつを探るための重要な研究対象である。そして大規模都市遺跡モヘンジョダロの後背地であるパキスタン南部、シンド州の小規模遺跡について、土器の生産・流通に関する研究は未だ少ない。本研究はシンド州におけるインダス文明の小規模村落における土器の通時的変化、および土器の生産・流通ネットワークの実態を解明するため、パキスタン、シンド州にあるインダス文明期の小規模遺跡バンドー・クボとタルール・ジェ・ビットから出土した土器の基礎的研究と胎土分析を行った。今回はバンドー・クボ遺跡出土土器の基礎的研究を中心に行い、全24層の中での土器の通時的変化を定量的、定性的に記載した。この土器の通時的変化は出土層位と放射性炭素年代値を伴う点で、既報告を補強するものである。これにより、現在分析中の胎土分析結果から土器の生産・流通体制の通時的変化を考察するうえでの基礎を構築した。

ダイチン・グルン江南地域における駐防八旗研究

葉　　勝　　京都大学大学院文学研究科

本研究の中心であるダイチン・グルン（＝大清国、満洲語daicing gurun）は、領土や民族、宗教等の各面で今日の中国の基となっている。大清帝国の統治維持における軍事の根幹の一つが駐防八旗であった。駐防八旗を研究することで、帝国の地方に対する支配の様態や、大清の多元統治の特色を窺い得る。また多民族国家である現代中国の形成を理解し、前近代の諸帝国の近代への移行に関する難解な問題の解決の糸口にも繋がる極めて重要なテーマでもある。中国で行われる歴史研究は現在、政府に迎合する傾向と清末以来の大漢民族主義の研究伝統、近年高揚する大漢民族主義を内核としながら民族団結を強調する中華民族主義の影響を受けており、それは八旗研究においても例外ではない。このような結論ありきの研究は多少とも結論の客観性に影響を与えかねない。このような研究体制を克服し、またこれまで、史料収集と読解の困難さから漢文文献に比べ利用の少なかった大清帝国国語である満洲語文献を多く使用することで、より史実に近い歴史研究を目指すことは、本研究の重要な目的である。

禁転載

元時代の水墨人物画の研究　―画僧による作品を中心に―

李　　宜蓁　　現 九州大学・人文科学研究院　専門研究員

本研究は、元時代の水墨人物画を取り扱うものである。水墨人物画は唐末五代初に誕生し、肉身が細筆で、衣紋が溌墨による墨面に近い粗筆で描かれていることを特徴とする。北宋以前の水墨人物画はほとんど残っていないが、南宋と元時代の水墨人物画は数多く現存している。そのうち、元時代の水墨人物画は、南宋の水墨人物画とは異なる様式上の特色をもつことが先行研究において指摘されてきたものの、個々の作品とそれをめぐる人や場との関係性を重視する新たな美術史研究の関心からみれば、未だ大きな研究の余地がある。本研究はまさに、元時代の水墨人物画とその制作文脈の関係性を再検討することに重点を置く。

本研究では、雪菴、絶際永中、因陀羅、黙菴という元時代の画僧による水墨人物画を対象とする。雪菴は民間仏教である頭陀教の教主で、永中は中峰明本という江南の禅僧を中心とする幻住派の禅僧である。また、因陀羅はインド僧といわれ、黙菴は1320、30年代に入元した日本僧であるが、この二人はいずれも永中と同様に中国の江南禅林との関わりが深い禅僧である。本研究では、雪菴筆「羅漢図冊」（静嘉堂文庫美術館）、永中筆「白衣観音図」（クリーヴランド美術館）、因陀羅筆「観音図」（個人）、黙菴筆「布袋図」（MOA美術館）を中心に、元時代の水墨人物画の諸相を考察したい。

戦間期ソ連・イラン関係史

李　　優大　　東京大学大学院法学政治学研究科博士４年
（現 東海大学国際学部　特任講師）

ソビエト政権は、帝政ロシア政府から対イラン政策をいかに継承したのか。本研究は、この問いに取り組む。それにより本研究は、ロシア（ソ連）外交史において第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の時期とはいかなる時代だったかを考察することを目的としている。その際、モスクワのロシア外務省に付属するロシア連邦外交文書館を渉猟して得られる未公刊史料や、ペルシャ語および英語の公刊史料を利用するマルチアーカイバルな方法を採用し、複眼的な研究を行った。本研究は、戦間期のソビエト政権の対イラン政策は、旧体制との差別化を図るべく「反帝国主義」を高らかに謳いながら、実際は、帝政期からの顕著な歴史的連続性を有した、ということを示した。それにより、ロシア（ソ連）外交史における戦間期は、ロシア革命という世界史上特筆すべき体制転換にもかかわらず、帝政期から連続していたと捉え直されるだろう。

※所属、役職は申請時、（　）内は2023年７月報告書提出時